

## 【実践報告】

# いこまいセミナーを通した学生支援の取り組み 3

## 全構成員が参加可能なグループプログラムへの発展

堀田 亮<sup>1)・2)・3)</sup>，川上 ちひろ<sup>1)・4)</sup>

1) 岐阜大学教育推進・学生支援機構

2) 岐阜大学保健管理センター

3) 岐阜大学医学部附属病院

4) 岐阜大学医学教育開発研究センター

### 要旨

少人数制のグループプログラムである「いこまいセミナー」の2018年度の概要および成果と課題をまとめた。プログラムは多部局協働であるとともに、学生の協力も得て開催している。今年度後期より、教職員も参加可能としたことで、いこまいセミナーは岐阜大学の全構成員を対象としたプログラムへと発展を遂げた。前期は日常生活、学修、就職活動に必要なスキルアップを主たる目的に全6回開催し、延べ44名の参加があった。後期は学内の諸施設を利用して様々な体験ができるプログラムを全9回開催し、延べ93名（うち教職員延べ21名）の参加があった。アンケート結果から、参加者の満足度が非常に高いプログラムを提供できたと言える。今後は実施したプログラムを定量的に評価し、いこまいセミナーの価値や効果を実証していくことが課題として挙げられる。

キーワード： グループプログラム，学生支援，協働，正課外教育，学生企画

### 1. はじめに

学生間の交流，日常・学修・就職活動に役立つスキルの獲得，要支援学生の早期発見，学生支援機関の広報，教職員の学生支援風土の醸成を目的とした「いこまいセミナー」も，前身の「スキルアップグループセミナー」を含めれば，2018年度で4年目を迎えた。開催当初は，面接試験やグループディスカッションに必要なスキルとしてのコミュニケーション力やリラクセーション・スキルの習得を目指したものであり，主に就職活動を控えた学生を対象としたものであった。しかし，徐々に学内認知度も高まり，様々な学年の参加者や留学生の参加も増えた。そこで昨年度からは，前期はこれまで通りスキルアップ

プに焦点を当てたプログラム構成とし、後期は多くの教員や学生と協働して、学内の諸施設を利用しながら様々な体験ができるプログラム構成とした。これにより、いこまいセミナーは、より多様なニーズに応えられるように発展していったと言える。

著者らはこれまで 2015 年度<sup>1)</sup>、2016 年度<sup>2)</sup>、2017 年度<sup>3)</sup> の取り組みの概要と成果をそれぞれ報告してきた。本稿では、「いこまいセミナー2018」の概要および前年度からの変更点を報告し、実践内容についてまとめる。加えて、参加者の属性やアンケート結果から本プログラムの特徴を考察し、開催の効果、課題、今後の展望を述べる。

## 2. いこまいセミナー2018 の概要

### セミナーの概要

セミナーの概要と開催日時、参加人数を表1に示した。2018年度のいこまいセミナーは、前期6回、後期9回、計15回を毎回異なる内容で開催した。今年度は前後期ともに1回ずつ、学部生が主担当者になって企画したプログラムを開催することができた。

実施期間は、前期が2018年5、6月で、後期は2018年10、11、12月であった。前後期ともに、実施時間は例年通り、水曜の午後に行った。昨年度から取り入れた、セミナー開始前に会場（サポーターズルーム）で開催した各自持ち寄りのランチ会「いこまいランチ」については、前期は開始前30分間で開催したが、後期は会場が実施日ごとに異なったため、開催を取りやめた。

表1-1 2018年度いこまいセミナーの概要（前期）

日程	プログラム名	担当者	参加人数	前期合計
5月16日	人前で緊張しないためのRelaxation法	堀田亮	9	44
5月23日	新しい自分と出会う身だしなみ講座	河村あゆみ（障害学生支援室）	10	
5月30日	相手との関係をよくするCommunicationのコツ	藤崎和彦（医学教育開発研究センター）	11	
6月6日	人間関係のトリセツを作ろう	西尾優花（応用生物科学部2年生）	6	
6月13日	始めてみよう お弁当生活！	高田麻紀（管理栄養士）	7	
6月20日	Planning de 夏休みのかしこい過ごし方	川上ちひろ	1	

表1-2 2018年度いこまいセミナーの概要（後期）

日程	プログラム名	担当者	参加人数	後期合計
10月24日	ヨガ・アロマ・マインドフルネス	熊谷佳代（教育学部）	16 (5)	93 (21)
10月31日	相手を飽きさせない！プレゼンのコツ	益子典文（学修協創開発研究センター）	18 (3)	
11月7日	農場体験 in フィールドセンター	大場伸哉（応用生物科学部）	7 (0)	
11月14日	災害のリアル〜被災するとどうなるの？〜	小山真紀（工学部）	8 (4)	
11月21日	上宮珈琲 2号店	上宮成之（工学部）	17 (7)	
11月28日	君も“コード・ブルー”に対処できる	早川佳穂（医学教育開発研究センター）	4 (0)	
12月5日	天使と触れ合う60分	岐阜大学保育園ほえみ	6 (1)	
12月12日	他文化体験・多文化交流	シティ・エズリン・ビンティ・イスマイル（工学部1年生）	7 (1)	
12月19日	おいしい岐阜発見！地産地消のおやつ作り	高田麻紀（管理栄養士）	10 (0)	

注）参加人数の（ ）内は教職員の参加者数

対象は、前期は大学に在籍する全学生（学部生、大学院生、非正規生）とした。後期は岐阜大学の教職員もすべて参加対象とした。その経緯と概要については後述する。今年度も、参加者一人一人の体験、発言、交流機会を十分に確保できる10名を各回の定員とした。しかし、申込が10名を超えるプログラムもあったため、その際は実施担当者と協議の上、受け入れ可能か判断した。その結果、今年度はすべての申込者を受け入れた。参加者は、前期

延べ44名、後期延べ93名（うち教職員延べ21名）、合計延べ137名であった。

参加受付は、例年通り、申込先アドレスに、参加希望プログラム・日時、学籍番号、氏名、所属学部、電話番号を記入して送信してもらった。教職員の参加申込も同様に行った（学籍番号は記入なし）。参加者からのメールには、受信確認と受付完了のメールを返信した。定員に余裕がある場合は、当日参加も可とした。なお、途中入退室も認めた。

広報活動は、各学部の初年次セミナー、保健体育特別講義、就職活動支援ガイダンスの時間を利用して、実施担当者が自ら説明、案内した他、各種学内掲示板に案内チラシを掲示した。案内チラシのデザインは、昨年度の「ハーバリウムを作ろう：今日から始めるボタニカルライフ」の主担当者である教育学研究科美術講座大学院生の加藤司氏（2017年度修了生）に依頼した。チラシは半期ごとの概要版と各回の詳細版を作成した。前期の概要版を図1に、各回の詳細版の一例を図2に示す。学生の大学メールアドレスへの案内は、昨年度と同様に、毎週月曜日に、その週に開催されるプログラムと、それ以降のプログラム2、3回分の案内を行った。また、保健管理センターホームページ内のトップページに実施予定のプログラムの案内を掲載し、「いこまいセミナー」のページには、過去に開催されたプログラム一覧を掲載した。

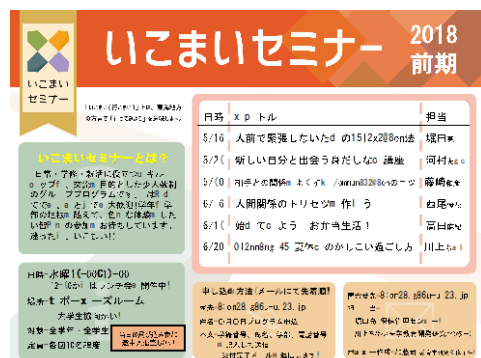


図1 前期概要チラシ



図2 各回詳細版の一例

会場は、前期は学生会館2階の大学生協売店前にあるサポーターズルーム（机・椅子・ホワイトボード完備）を利用した。5月30日のプログラムは、教育推進・学生支援機構が雇用する「学習支援学生スタッフ」の受講を強く勧めたいとの要望がアカデミック・コアの事務職員よりあったため、会場もアカデミック・コアの会議室を利用した。後期は、内容に応じて学内の各施設で実施した。

参加学生に対しては、プログラム終了後にアンケート調査を行った。内容は昨年度のものを踏襲し、参加プログラムの期待度、満足度、参加度を Visual Analog Scale (VAS) で回答を求めた他、参加した理由、プログラムに参加して得られた新しい発見や気づき、今後に活かしていきたいこと、プログラムの残念に思った点、今後、開催してほしい企画、意見・質問・感想等を自由記述で回答を求めた。加えて、セミナー開催の認知媒体について選択式で回答を求めた。

昨年度からの取り組みである、「コンセプト説明会」の開催は、集合形式ではなく、各実施協力者に個別で実施した。「感謝の集い」は2019年2月13日に開催した。都合で参加できなかった実施担当者もいたが、いこまいセミナー2018の反省と協力者間の親睦を兼ねて、昨年度と同様の形式で実施した。

今年度の新たな取り組みとしては2点ある。1点目は、教職員の参加を可能としたことである。これは、これまでの取り組みを知った教職員から「参加したい」との声が挙がったため、実現に至った。これにより、いこまいセミナーは岐阜大学のすべての構成員を対象としたプログラムとなった。教職員への広報は、Ggroup上の通知機能を使用して周知した。勤務時間中の参加となるため、学内研修として位置づけ、研修カードである「miruca」を使用可能とした。2点目は、プログラム中に参加者に名札の掲示をお願いしたことである。いこまいセミナーは参加者が増えたことにより、プログラム冒頭に参加者の自己紹介の時間を十分に取ることが難しくなっていた。また、プログラム開始後に参加者間でコミュニケーションを取ろうにも、一度聞いた程度ではすべての参加者の名前を覚えることは難しかった。そこで、名前、所属、学部を記入した名刺サイズのカードを首から下げてもらい、自己紹介の短縮化と、参加者間のコミュニケーションの円滑化を図った。

### 3. いこまいセミナー2018 前期プログラム

#### 人前で緊張しないためのRelaxation法（5月16日）

堀田がファシリテーターを務めた。リラクセーション法を取り入れたプログラムは毎年開催しており、今年度で6回目となった。内容や進行は毎回変えており、今回は「不安や緊張を感じやすい人、それに打ち勝ちたい人」を対象に筋弛緩法を体験した。参加者は9名であった。アイスブレイク（約10分）や心理学の研究知見や理論を用いたミニレクチャー（約15分）を行った後に筋弛緩法を体験した（35分）。筋弛緩法は心理的、生理的效果、実施のポイントの解説を行った。今回は腕と肩の筋肉を使った体験を行ったが、他にも様々な実施法があることを紹介した。参加者ごとにどの筋肉が緊張しやすいか報告しあい、筋弛緩法を日常生活にどのように取り入れられるか検討した。感想では「人はそれぞれ緊張の仕方が異なっていることを知れた」、「緊張は気持ちの問題だけではなく、身体に力が入っていることも関係していると分かった」など緊張状態およびその解し方に対する理解が深まったという意見や、日常生活に積極的に取り入れていきたいとの意見が多く挙げられた。

#### 新しい自分と出会う身だしなみ講座（5月23日）

サポートルームの河村（美容師）がファシリテーターを務め、「ヘアスタイルやメイクの整え方を知りたい人」を対象に開催した。参加者は10名であった。はじめに、参加学生が日常のヘアメイクで悩んでいること、気になっていることを共有した。一番多い悩みが「眉の整え方」ということで、今回は眉の手入れ方法を中心に、学生に対して実演をしながらレ

クチャーを行った。印象を大切にしたいと思いつつも、眉の整え方がわからず前髪で隠している学生が数名おり、人それぞれ眉毛は違い、眉毛の生える方向も違うことをお互いで確認し合い、眉毛の基本の形、ハサミなど道具の使い方、描き方を具体的に学んだ。学生から「眉毛だけでも雰囲気が変わる」「眉毛は大切」「自分に合う眉毛をみつきたい」という声もあった。身だしなみのひとつでもあるヘアやメイクは、具体的に学ぶ場が少なく、学生は必要性を感じているものの、どうしてよいかわからないままになってる。特に就職活動がはじまりヘアメイクに悩んだとき、相談する人がいないという学生も多く、普段の生活に繋がるように、ヘアメイクの困りごとを誰に相談できるかも話し合った。美容師や薬局の美容部員など、相談できる人が身近にいることを知り、「もっと自分に合うヘアメイクを学びたい」という今後に期待する感想も出ていた。

### 相手との関係をよくする Communication のコツ (5月30日)

医学教育開発研究センター教授の藤崎和彦がファシリテーターを務め、「大学や社会で人と良い関係を作りたい人」を対象に開催した。参加者は11名であった。本プログラムは、アカデミック・コアのスタッフより、教育推進・学生支援機構が雇用する「学習支援学生スタッフ」に受講させたいとの申し出があり、会場もアカデミック・コアで開催した。最初にファシリテーターから参加者へ「コミュニケーションで困っていることは何か？」という質問があり、その解答として「うまく話せない」「話が續かない」「なにを話したらいいかわからない」などの声が聞かれた。さらにそのアドバイスとして、「うまく話せることに焦点が置かれるが、実はコミュニケーションの基本は、相手の話を聴く“積極的傾聴”が大切である」という解説があった。“積極的傾聴”などのコミュニケーションの具体的なスキルを学んだ上で、その後参加者同士がペアになり、スキルを意識したワークを行った。参加者からは「傾聴についての知識はあったが、実践できていなかったので使っていきたい」「積極的にコミュニケーションする場を自分から作ろうと思った」「今までよりも踏み込んだ会話をしたいと思った」等の感想が聞かれた。参加者にとって当たり前のように行っている日常の出来事だが、意識することでよりよいものになるという確信につながったようである。

### 人間関係のトリセツを作ろう (6月6日)

応用生物科学部2年生の西尾優花がファシリテーターを務め、「上手な人との付き合い方やグループディスカッションの進め方を学びたい人」を対象に開催した。参加者は6名であった。本プログラムは、前年度のいこまいセミナーに参加した西尾氏から、企画運営に携わりたいとの申し出があったことから実現した。当初は“平和についてみんなで話し合う”プログラムを計画したが、数回の話し合いの後、参加者のニーズを考えて、ディスカッションの仕方に焦点を当てたプログラムにすることとした。当日は西尾氏も所属する大学消費生活協同組合が運営する「学生委員会」の学生3名もファシリテーションの協力者として参加した。進行は、対人関係で問題が起きた場面を設定しグループディスカッションを行う、

話し合いをより良いものに改善するためのスキルやアイディアの出し方に関するレクチャーをする、レクチャーを基に再度ディスカッションを行う、ディスカッションで出た意見を3つにまとめて発表するという流れで行った。初対面の学生もいる中で、レクチャーを行った後は非常に活発なディスカッションが展開された。参加学生は、人間関係を円滑に進める上での必要なことが認識されたとともに、「しっかり時間を取って考えれば問題の解決に向かうことを学んだ」、「自分では考え付きもしなかったことを相手から聞けたので、色んな人の意見を聞けるようにしたい」といった感想が見られたことから、グループディスカッションの意義に関する理解が深まったと思われる。

#### **始めてみよう お弁当生活！（6月13日）**

保健管理センター管理栄養士の高田麻紀がファシリテーターを務めた。リラクゼーション法同様に、調理企画も毎年開催している。今回は「簡単に栄養バランスの取れたお弁当生活を始めたい人」を対象に開催した。参加者は7名であった。2つのグループに分かれ、予め下準備しておいた食材を使って、キャベツつくね、ニンジンしりしり、小松菜のおかか和え、簡単ナムル風の4品を調理した。完成したお弁当を食べながら、管理栄養士より「3:1:2 弁当箱法」についてのレクチャーがあり、自分にあったサイズの弁当箱を選ぶ、動かないようにしっかり詰める、主食:主菜:副菜の割合を3:1:2にする、同じ調理法のおかずを重ねない、全体をおいしそうに詰めるの5つのルールを紹介した。弁当生活を始めてくてもなかなか始められない学生にとって、最初の一步を踏み出すために大変有意義なプログラムであったと思われる。参加学生からは「(意外に)簡単に作れる」、「これから自炊を頑張ってみようと思う」との感想が多く挙がった。

#### **Planning de 夏休みのかしこい過ごし方（6月20日）**

川上がファシリテーターを務め、「夏休みの有効な使い方を考えたい人」を対象に開催した。計画する力（プランニング力）は大学生活および社会人になってからも必要なスキルであり、昨年度に引き続いての開催となった。本年度の参加者は1名であった。プランニングと言ってもいろいろな方法があるが、今回はまずランダムに「将来やりたいこと」を付箋にできるだけ多く書き出してもらった。次にそれらを「①すぐにできるもの（短期目標）」、「②数か月から1年にやりたいこと（中期目標）」、「③少し先の将来にやりたいこと（長期目標）」に分けた。視覚化して分類することによって自分がすべき行動の優先順位が明らかになり、具体性が増したと考えられる。参加者が1名であったので、他の参加者（日本人学生）との交流はできなかったと残念がっていたが、「将来の夢を達成するために今やるべきことを考えたらいいと思います」と感想を述べてくれた。参加者が少なかったことについては、要因を明らかにする必要があると考える。

### **4. いこまいセミナー2018 後期プログラム**

### ヨガ・アロマ・マインドフルネス (10月24日)

教育学部教授の熊谷佳代がファシリテーターを務め、「ヨガやマインドフルネスを体験したい人、アロマに興味のある人」を対象に開催した。学生の参加者は11名であった。本プログラムより教職員も参加対象にしたところ、5名の参加があった。参加人数が多かったことから、全学共通教育棟のアクティブラーニング室で開催した。自身の呼吸に注意を向けることや背骨や肩甲骨の正しい位置や動かし方を意識しながら様々なヨガのポーズを体験した。途中でペアになって、身体の位置や動きを確認し合い、コミュニケーションを取りながら進めた。参加者は「身体の疲れが取れない」、「身体に痛みがある」、「寝付きが悪い」など様々なニーズがあって参加しており、その一つ一つに丁寧に答える形でプログラムは進行した。今後も継続開催を希望するとの感想が多かった。

### 相手を飽きさせない！プレゼンのコツ (10月31日)

昨年度に好評であったため今年度も開催となった。学習協創開発研究センター長・教授の益子典文がファシリテーターを務め、「ちょっとした工夫で、聞き手を引きつける提示資料を作れるようになりたい人」を対象に開催した。参加者は学生15名、教職員3名であった。参加人数が多かったことから、アカデミック・コアで開催した。昨年度に引き続き、「同じ材料（素材）でもちょっとした工夫で、聞き手を引きつける提示資料を作成できる」方法を、実際にプレゼンしてもらいながら伝授してもらった。益子氏自身のこれまでの数々の教育経験なども聞かせてもらい、参考になる点が多かった。参加者からは「聞く側にリアルなイメージを持ってもらい能動的にすることが大切だと分かった」、「話を聞いてくれない、ではなく、“話が聞きたい” プレゼンにしないといけないと思った」、「相手を飽きさせない、つまりアクティブラーニングであると分かった」などの感想があった。この回の参加者がとても多く、プレゼンテーションへの関心が職員、学生問わずかなり高いことがうかがえた。修論や学会など、さまざまな発表の機会に生かしてみたいという声が多かった。一方で、中には聞き手を引きつける資料の作り方よりも、見やすいスライド作りや発表の仕方といったニーズを持った参加者もいた。ひとえに“プレゼンのコツ”と言っても構成要素は様々であり、タイトルや概要説明でどこに焦点を当てているかを明確に示さないと、参加者のニーズとは外れた内容になってしまう可能性があるので注意が必要である。

### 農場体験 in フィールドセンター (11月7日)

応用生物科学部教授・岐阜フィールド科学教育研究センター長の大場伸哉がファシリテーターを務め、同センターの職員も運営に協力した。本プログラムは「フィールドセンターに興味のある人」を対象に開催した。参加者は学生7名で、教職員の参加はなかった。最初にフィールドセンター内の見学をさせてもらった。同じ大学に通っていても、このような場

があることに感激している学生が多かった。その後、大場氏から「落ち葉、木材などを使って、自分たちで火を熾してみよう。」と提案（無茶ぶり）された。参加者は3チームに分かれ思い思いに火おこしをして、焼き芋の準備をした。その間に、牛舎で牛のブラッシングをしたり子牛に触れたりした。その後、焼き芋が出来上がり、全員で美味しくいただいた。参加者からは「いこまいは indoor の活動だと思ったけど、今日は outdoor の活動をやってよかった！」「応用生物科学部の専門に触れられてよかった」などの感想や、「焼き芋が美味しかった」「牛がかわいかった」という率直な感想も聞かれた。「食肉や乳製品についてもっと意識したい」という感想もあり、自然に触れ合う体験を通じて、自分たちの生活に直結する事柄であることを実感できたようである。

### 災害のリアル～被災するとどうなるの？～（11月14日）

工学部准教授の小山真紀がファシリテーターを務め、「災害についての理解を深めたい人」を対象に開催した。参加者は学生4名、教職員4名であった。本プログラムは、近年岐阜近郊でも地震や台風などの災害が増えていることから、学生への防災教育が必要であると考え、小山氏に依頼し、実現した。東日本大震災や阪神・淡路大震災および最近の台風や地震の事例を用いて、映像資料や統計を基に直接死、関連死、災害発生後に必要な対応についてレクチャーを行った。TVや新聞などでは報道されない災害の実態についても解説があり、参加者は災害時に気をつけるべきポイントを知り、自分自身でできる災害対策について学ぶことができた。

### 上宮珈琲 2号店（11月21日）

昨年度に好評であったため今年度も開催となった。工学部教授の上宮成之がファシリテーターを務め、「工学の知識を応用したコーヒーの淹れ方を知りたい人」を対象に開催した。参加者は学生10名、教職員7名であった。参加人数が多かったことから、生協第2食堂で開催した。今回は「産地の異なるコーヒーを飲んでみよう」をテーマに、コーヒーの美味しさを決める要素の説明やコーヒーの様々な淹れ方の紹介を行った後に、実際に色々な種類のコーヒーを淹れて試飲した。中にはコーヒー豆を持参する参加者もいた。上宮氏が実演する際は動画を撮影する者もあり、おいしいコーヒーが飲めればいいだけではなく、淹れ方を学びたいという熱心な参加者が多かった。また、「所属部署は学生と接する機会がほぼない。せっかく大学で働くのだから学生と接したいと思っていたので今回は貴重な場だった」と感想を話した教職員がおり、コーヒーという共通の話題を通じて学生と教職員がフラットに交流できる機会となった。

### 君も“コード・ブルー”に対処できる（11月28日）

医学教育開発研究センター技術補佐員の早川佳穂がファシリテーターを務め、「医学生や看護学生が実習で使用するシミュレーターを体験してみたい人」を対象に開催した。参加者



は学生4名で、教職員の参加はなかった。医学部の実習室であるスキルスラボで開催した。医療系ではない一般の学生でも使用可能なシミュレーター、血圧測定、気管挿管、イチロー®（心臓の音が聞ける）、Mr.ラング®（呼吸音が聞ける）等、いくつか提示し、体験してみたいものを選んでもらった。シミュレーターは高価なものが多く、その金額に驚く参加者もいた。最後の感想で「手技と言われるだけあって技術だな」「すべてが新鮮だった。医療に携わることはとても大変だということが分かった」などがあつた。それぞれの学部ではどのような授業を行っているか知る機会はほとんどないが、このようなプログラムで自分の専門以外の学習内容に触れることができるのは、参加者の視野が広がるきっかけになるのではないかと感じる。

### 天使と触れ合う 60分（12月5日）

岐阜大学内にある岐阜大学保育園ほほえみの職員に協力いただき、「乳幼児とふれあいたい人」を対象に開催した。参加者は学生5名、教職員1名であつた。保育園がちょうどお昼寝の時間だったので多くの園児は寝ていたが、寝付けない園児と遊んだり、保育士から園児の普段の様子や仕事内容について話を伺った。中には子どものいる参加者もあり、「自分の子が小さかった頃を思い出した」と話していた。また留学生のご夫婦は、将来自分たちの子どもを持ちたいということでイメージづくりで参加されたと話していた。参加動機はそれぞれであつたが、天使のようなかわいい園児と楽しく触れ合うことができた時間だった。

### 他文化体験・多文化交流（12月12日）

マレーシアからの留学生で工学部部1年生のシティ・エズリン・ビンティ・イスマイルがファシリテーターを務め、「イスラム文化を学び、体験したい人」を対象に開催した。参加者は学生6名、教職員1名であつた。本プログラムは、今年度前期のいこまいセミナーに参加したエズリン氏から、自国の文化を日本人学生に知ってもらい、交流を深めたいとの申し出があつたことから実現した。当日は他にも3名の留学生がファシリテーションの協力者として参加した。最初にイスラムの民族衣装であるヒジャブを女性参加者は身につけた。それからアラビア文字についての読み方、書き方に関するレクチャーがあり、アラビア習字を体験した。日本の習字の筆とは材質や書き方も異なるため苦戦しながらも、留学生から丁寧に教えてもらうことができた。また、アラビア習字の講師もしている留学生に、自分自身の名前を書いてもらい、参加者へのプレゼントとした。最後はイスラム文化のマナーに関してクイズ形式で学習した。これまでコーランの存在や飲酒の禁止など知識としては知っていたことであっても、なぜ従うのか、どういう理由からそのルールが存在しているのかについての解説があり、参加者のイスラム文化への理解が深まったと思われる。

### おいしい岐阜発見！地産地消のおやつ作り（12月19日）

前期に引き続き、高田がファシリテーターを務め、「岐阜の食材を使って、料理を楽しみ

たい人」を対象に開催した。参加者は10名で、教職員の参加はなかった。野菜はすべて岐阜県産のものを使用し、里芋の五平餅風、小松菜の蒸しパン、にんじんの米粉あんまきを調理した。留学生も3名参加しており、ムスリムの学生もいたことから、ハラルフードに配慮した食材を使用した。完成品は見栄えもとてもキレイであったため、参加者の多くは写真に残っていた。その場でSNS上にアップする学生もあり、参加学生間でSNSアカウントの交換が積極的に行われ、交流が深まっていた。また、参加学生の中に、次年度に留学を控えている学生と、その留学先の大学から岐阜大学に来ている留学生がおり、初対面であったが情報交換の機会となった。このように、いこまいセミナーは思いもよらない出会いの場にもなるプログラムである。試食後には岐阜県産の食材の産地マップのレクチャーが行われ、岐阜県で生産されている野菜や家畜の多さに参加者は驚いていた。

## 5. 参加学生の特徴とアンケート結果

実数では86名の学生（学部生60名、院生26名）、17名の教職員（教員1名、職員16名）、計103名が参加した。前年度に比較して、学生の参加者数は16名増加した。今年度も女子学生（47名）の方が男子学生（39名）よりも参加人数が多かったが、全参加学生に占める男子学生の割合は増加した。在籍学生数に対する割合は、女子学生（1.7%）の方が男子学生（0.8%）よりも高かった。参加回数は、1回が67名、2回が10名、3回が7名、4回が2名であった。後期のプログラムから参加可能とした教職員については、女性（12名）の方が男性（5名）よりも参加人数が多かった。参加回数は、1回が13名、2回が4名であった。

参加学生の所属学部は、人数は工学部（36名）、教育学部（20名）、応用生物科学部（14名）、地域科学部（8名）、医学部（4名）、その他（4名）の順に多かった。在籍学生数に対する割合では、今年度は教育学部（1.7%）が最も高かった。留学生の参加は15名で、昨年度より倍増した。

VASで測定したプログラムに対する期待、満足、参加度は、前期はそれぞれ10点満点中8.2、8.7、8.2点、後期は同様に9.2、9.3、8.9点とすべて高い値を示していた。特に、11月14日の「災害のリアル～被災するとどうなるの？～」(それぞれ9.7、9.8、9.4点)と11月28日の「君も“コード・ブルー”に対処できる」(それぞれ9.9、10.0、9.6点)と、12月12日の「他文化体験・多文化交流」(それぞれ9.5、9.8、9.2点)が高かった。ほとんどのプログラムにおいて期待度の得点を満足度の得点が上回っていたことから、参加者に対しては参加前の期待以上のプログラムを提供できたと言える。

「参加理由」に関しては、学生は“プログラム内容への興味関心”(90件)が最も多く、次いで“友人に誘われて”(16件)、“他の人と交流したかったから”(10件)、“教職員に誘われて”(7件)と続いていた。前年度に比べて、交流目的の参加が増えており、“何となく・当日参加”を理由とした参加はなかった。教職員は“プログラム内容への興味関心”(19件)

と“他の人と交流しなかったから”(4件)が参加理由であった。

「今後開催されれば参加したい企画」は、その日のプログラムの再開催を希望する意見が最も多かった。他には、“留学生との交流企画”(9件)、“調理や栄養に関するプログラム”(7件)、“プレゼンテーションで緊張しない方法”(5件)、“コミュニケーションスキル”(2件)が複数回答あった。

今年度新たに追加した「セミナー開催の認知媒体」に関しては、学生は“メール”(68件)が最も多く、次いで“学内掲示(ポスター)”(23件)、“友人から”(15件)、“授業”(13件)、“保健管理センターのホームページ”(4件)と続いていた。教職員は“メール”(10件)と“学内掲示(ポスター)”(10件)が主であり、あとは“保健管理センターのホームページ”(4件)であった。

## 6. 開催の効果・今後の課題と展望

本年度も多くの教職員、学生と協働することはいこまいセミナーを開催することができた。継続的に開催しているプログラムもあれば、新規に開催したプログラムもあり、ますます多様なプログラムを提供できたと言える。

本年度からは、教職員も参加可能としたことで、いこまいセミナーは岐阜大学の全構成員を対象としたプログラムへと発展を遂げた。参加した教職員にとっては忙しい日常業務の中で一息つける時間となり、普段学生との接点がない部署に所属する職員にとっては学生と交流する機会となる等の効果があったと思われる。そもそも業務では「学生と教職員」という関係性であるが、いこまいセミナーでは「参加者同士」というフラットな関係性が体験されることは学生、教職員どちらにとっても新鮮であったと考えられる。今後も“学生支援”という枠組みは守りつつ、教職員にとっても有益なプログラムを展開していきたい。

また、2017年度の課題と展望<sup>3)</sup>で取り上げた「学生主体企画の充実」も、本年度は自発的な申し出を受けて2回開催することができた。企画者の学生は「学科やバイト先の友人がポスターを見てくれて話題にしてくれた。自分の活動を伝える良いきっかけになった」と語っており、いこまいセミナーが自分の取り組みを広く知ってもらう機会、自己実現の機会になったと思われる。今後も学生主体企画を積極的に取り入れていきたいと考える。

最後に今後の課題としてプログラムの妥当性およびその価値についてまとめる。これまでの実践では、実施者(著者)が「習得が望まれるスキルや知識」を合議した上でプログラムを構成してはいるものの、実施者および実施協力者の主観によって内容や実施形態を決定してきたのが現状である。つまり、「学生が求めているスキルや知識(プログラム)は何か」についての視点は十分ではない。加えて、参加学生に対して、プログラムで扱ったスキルや知識がどれほど意識されるようになったかは評価できていないという問題がある。これらの現状を発展的に解消するための一手段としては、プログラム評価研究に基づいた実践が挙げられる。プログラム評価とは、明確化・正当化・体系化された査定を行い、プログ

ラムの価値を判断し、後の意思決定に有用な情報を提示すること<sup>4,5)</sup>であり、プログラムの説明責任および質向上（改善）を果たすために有効な手法である。今後は学生に対するニーズ調査や、参加学生へのプログラム後の調査等を行うことによって、いこまいセミナーの妥当性と価値を明確化していくことが望まれる。

## 7. 付記

いこまいセミナーの運営にあたっては、保健管理センター、障害学生支援室、医学教育開発研究センター、就職支援室のみなさまにご協力をいただきました。実施にあたっては、障害学生支援室の河村あゆみさま、医学教育開発研究センターの藤崎和彦先生、早川佳穂さま、応用生物科学部2年生の西尾優花さん、保健管理センター管理栄養士の高田麻紀さま、教育学部の熊谷佳代先生、学習協創開発研究センターの益子典文先生、応用生物科学部の大場伸哉先生、フィールド科学教育研究センター職員のみなさま、工学部の小山真紀先生、上宮成之先生、岐阜大学保育園ほほえみの職員のみなさま、工学部1年生のシティ・エズリン・ビンティ・イスマイルさんにご協力いただきました。また、教職員への広報活動に人材開発部の古田圭子さま、奥村真衣さまにご協力いただきました。ここに記して感謝申し上げます。ありがとうございました。

### 【参考文献】

- 1) 堀田亮, 西尾彰泰, 舩越高樹, 石垣倫子, 岩田英孝, 加藤典子, 服部三和子, 山本眞由美(2016). スキルアップグループセミナーの実践-保健管理センター・障害学生支援室・就職支援室が共催した学生支援の取り組み-, 岐阜大学教育推進・学生支援機構年報, 2, 156-167.
- 2) 堀田亮, 舩越高樹, 川上ちひろ(2017). いこまいセミナーを通した学生支援の取り組み-多部局協働授業外グループプログラムの実践-, 岐阜大学教育推進・学生支援機構年報, 3, 268-279.
- 3) 堀田亮, 舩越高樹, 川上ちひろ(2018). いこまいセミナーを通した学生支援の取り組み 2-教員・職員・学生が協働したグループプログラムの実践-, 岐阜大学教育推進・学生支援機構年報, 4, 200-211.
- 4) Scriven, M. (1991). *Evaluation Thesaurus* (4th ed.). Newbury Park, CA: Sage.
- 5) 安田節之(2011). プログラム評価: 対人・コミュニティ援助の質を高めるために. 新曜社.

(著者連絡先) 堀田亮 岐阜大学保健管理センター 〒501-1193 岐阜市柳戸 1-1

TEL : 058-293-2166 FAX : 058-293-2177 E-mail : horita@gifu-u.ac.jp